

ネトレプロコ&エイヴァゾフの チャイコフスキー・ガラ

取材・文 中東生
Text Shinobu Neka

「ディスタンスをとった客席と
通常配置の舞台上」

例年ならばザルツブルクの街中がもつとも華やかな季節であるが、今年は観光客はいるものの、派手さがない。しかし開演前の祝祭劇場前には、着飾った観客と見物客の人混みがとりあえずできていて安心した。夏の終わりを愛おしむような8月25日、カント・リリコシリーズ、アンナ・ネトレプロコとユシフ・エイヴァゾフ夫妻のチャイコフスキー・プログラムを聞いた。

入り口ではチケットに併せて本人確認

書類を提示させ、感染者が出た場合に備えている。マスク着用が義務づけられているせいか豪華なドレスは目につかない。8人用の1階仕切り席に着くと、1席ずつ空けて座った4人全員がジャーナリストだった。平土間席も空間を置いて座っているが、ザルツブルク・モーツァルトウム管弦楽団は社会的距離を空けずに配置されていた。

《スペードの女王》と
《眠りの森の美女》

1曲目は《スペードの女王》で、「前奏曲」では指揮のミハイル・タタルニコフ

が、モーツァルトをレパートリーとするこの楽団からロシアの音を出そうと健闘していた。次いでネトレブコが夏らしい水色のドレスで登場し、上手寄り（カナル）でリーザになりきろうとするが、歌い始めると、全般的に声が微妙にうわずっている。そのうちに、すっかりスマートになったエイヴァゾフが登場するが、落とした体重ぶんの声量を補おうとするのか、舌根に力が入っている。しかし熱い愛を吐露しているうちに音楽が流れ、クライマックスに突入した。伯爵夫人を歌ったハンガリー出身のシルヴィア・ヴェレシユは、立派な声で威厳ある助演を果たした。

タタルニコフは続くバレエ《眠りの森の美女》の（ばらのアダージョ）も上手に盛り上げるのだが、テンションがすぐ下がるのが難だ。ダイナミックでのみテンションを保てる見え、最後はティンパニ奏者に同情するほどクレッシェンドをかけて曲を終えた。

《エフゲニー・オネーギン》と 《イオランタ》

次のオペラ《エフゲニー・オネーギン》では、アリアをそれぞれ披露した。タチヤーナの《手紙の場》でも、中間音で声が決まらないネトレブコはテンポを遅くしていいいに歌うが、それでもはまらない部分もあり、高音は少し苦しそうだった。レンスキーのアリア《青春は遠く過ぎ去り》を歌うエイヴァゾフは、レチタティーヴォの最後の音が上がりきらなかったが、アリアでは辞世の哀しみを

朗々と歌い切ったあとは、満足感をあらわにしていた。「ポロネーズ」でもタタルニコフはオーケストラを豪華な響きに導くが、テンポが少し滑るのは、やはり音楽的テンションを持続できないからだろう。盛り上げるのが上手なだけにもつたない。

最後はネトレブコお気に入りの《イオランタ》でようやく本領発揮となるが、最後まで上擦る部分は解決できなかった。エイヴァゾフは譜面台を置いて必死について行ったが、健闘して無事歌い切ったあとは達成感にあふれていた。

結果として、良いコンサートではあったが、ネトレブコの持ち役をエイヴァゾフと共演するための新レパートリー開拓に付き合われているような気がしないでもなく、消化不良感を数日引きずった。



ネトレブコとエイヴァゾフ夫妻も近年のザルツブルク音楽祭には欠かせない
©SF / Marco Borrelli